ヘ13
2901
9


180
170

門へ
2901
巻 9

昭和九年
七月五日
購求

# 春色梅美婦禰巻之九

江戸　爲永春水著

## 第十七回

成ハ春ちう男の人をうらぶと者よりし七意種の望ミ妬も
縁と縁五ハ関係の人ハ所ろ個ー浮ハ浮ろ知ねごも義
理と情を矣へそ不実の公ハ一点ぶろも持ぬ男ぶ
他の誘りも笑の種と為ら家知でまる極ハ夏身
ぞ異ぞ気ける三ハ猿寺の判法弁ハ代参の情ハ

中の不自由を退去して衣食の乏しきを撰び法業の尤多
業も気を敷めり好の在 俳諧の家風と号し名を反補と
稱けるら或時 獨徒然よ古き本紙 繰延し 紙をひもしむ古
人の金言

そも俳諧者流の徒 社中と稱へて連成るべきの交
連を交るるるく 容易くぐる 寄長 厚情を
撰こ連中を加へ 俗のも聽しくとるを撰びて
ざるの故よ 社中と呼とぞ 生紀 [illegible]

漢土の惠壹法師 [illegible] 八庭の池を自 [illegible]
植て 壹際の會を白蓮社と言此所を親友十八人
集會し七十八蓮社とのよ 謝靈運とよ [illegible] 社中

[illegible]
[illegible]れば謝靈ハ後キの [illegible] 公 新 [illegible] 易 [illegible]
[illegible]て社中よ加へ [illegible] 日本 [illegible] 山 [illegible]
遊とのふ俳諧師 惠壹法師のなりをまねて 俳 [illegible]

此ものを名付て今人〻ごとく社中と稱へさハげども
古も社中の頼母しげなる今ハ社中ハ朝夕斷金の
交りを稔人久〻寵他の如き形ひあり俗事熟〻
考へるに社中の名あつて社中の好意ゆゑ〻もつて俳
諧ハ主俗ゆ神やとく〻と如意和ぐ賑〻るるめ
出わ〻ぶ

ト続ケ〻本を下ゆ書き判へるゆど選ひるひると今の
俳諧ハ各〻ゆ上ものゆ仏猪ぶ言〻とあつて他のりと蕉

で悪く言ふぶうぶ風流の仏猪ハ出ものひとう俗人の交
雪まりも頼〻ぶ〻ひるぶ言〻ー三千風が行脚文集ゆ
神風混札七面〻集落〻ゆう紀文の闘返書の
関止時ゆー漸〻動ゆて辞ゆんとまれバ富ゆ識
やふふうゆ禍ふ人ゆるど遠ゆ 俳繁のゆるれべ
ゆふん

判へ元禄年中ゆ叶ゆるゆを書さうゆ後世の俳諧者の
気性ゆ温厚人ゆひ吾ゞト林〻き俗ゆ風雅ゆる楽

あるさん人を理屈ゑなりて叫をゑー判へアヽ引ゑんぶろ乞ぶこぢ
ふぎぐる様ごト獨言のふ折ふふ矣天山の麦の刈の落ぼ
く　判へヤモウ交刈ぎ詮方がゑん寝様ゝト萩具を
取出ー家を表訪へ交込来る堀下のお国表にはうろけ
上り息をせハしく賛後の方を見ゑりゑぶふ　判さん
ちやゝ彼戸を入て如実成ゑー　判へアヽ引ー惰りゝさ
行板今時分交出して来さのぢ赤伯父さんと宣花でも
あて出て来さのろ　判へイヱナニ殺じゃありませんが今萩ポ

お様様ハ是非逢ひけまぶゑゑぶあれて交出
あて来ゑんでありますぞ引　姉ゑゑト胸を様ト一七居る
の表判決第八案を没でゑへゑぶ側ハ座居　判へ分ぶ姉
ゑゑのぢ途中で行様ゑーさのろ　判へイヱ行様ゑるゑぶ
今萩表門へ見様の門宗さんが大変ハ騒を立て様
込で来て私とさーちぶゝて死ぬゑんぞと言て泣ゝ堂ハ
姉ハ頼をーて大きぎをやるゑぶ私きやゑまんでハ及物
で癌を付ふまる訴で どぎゑ毛ゑ毛ゑ跡ハ

不様逃出して来うんでござるまして 判へ[illegible]
なる爻さのうそして家内みな 強も居るひのぶ不用なる
るぞ その〳〵イエア 金時刻茶ゐ 俗父さんう来て居
るし 下女も 二人ぐらい居て その内家さんを取押て
ぐるそ居ますヨ

そもく お園が 秀引茶屋を 出せしは 孫舎の大性偵
大佛陰奚入道の 内家 中小佛義 有らと
りよ大臭の 世話みて 俄ゐ 使 情る奥のしく

ありけるなり 爺ハわ見ども 居ようお園のわ
らしきそのもなく 松ゐ 壬牙とくハいらて くもみし
只お園ゑ 淺くみいらて妻みを 落るもして
笑べきそのも わらふうと思ハ入て 以後 初の如
きくしるれバうるふ 妾 関ハ 女どゑ 抱へ
男ハべるふ 嬢ゑ 笑ひし もうり 考し 今 亜
さく 巨細のハ 明 されず 手孫ゑ 陰そ 貞 入 宮
も 解り 安 拙 [illegible] 先 爻 ハ 外面 [illegible]

我が国の作法の見世を繁昌させる一と
なりけりよと言しとぞ

判へそもそもやつ国のつとめものゝ分よりしてもその内義さんを今
歩歩うして遊廓して仕事ふ合けるとばかりも堀下の家
へ浮ふ言ひノウ　あの〳〵変ごろう今彩ア何でも赤
様の所へ寝うして赤ん成ヨ　判へそもそもやつ何様でも宜う
只言彩て仕事の家内へ赤を止宿さう　俗人さんも
且那もひつうしく言ふばらふ言ふせ　あの〳〵ひつうしく言さうと

わつて私が番ごと言出せば誰が分と言ふが誰方がありません
いつ論分様る立身出世をまるるのがあつさんばかりそれやつ
赤様の方の便りが切まるるのるう堀下の見世ごと
わつても出して黄やつ仕事せんハ宅初の赤様ハ桐伝
言ふば是非無して黄ふが後ようく何様ようも見捨へ
みるのひと出言ひごろう悪ふ落も出して黄りさのごろう
毎時言通うるのふば悪く思りてお出でるいヨ判さんお
茶さんハ此弟とのふ可愛ア方がのるう私ようんぞく彩ア

を思ひてお主でごらんけまども松まつの玄須朱八さんとのやうな
お茶桜く異見をあの言の時うしてお家男八辺でまいる
頼ひを言分してうう浮ふかなでも一生放まうひと公を
桜で男ひつあて居るのみ付てア可嬢ごと男ひてお主の成
まーナー涙をうあて変くうり判次郎の膝へまづり付
身をふうふと法入まぶ判次郎お園の背中を抱て
介抱をーなうう判ゴヒサお園嬢浮なさんなかもお茶を可
愛男ふるひるひけまども世の彩ナをしてひ

身の桜の者が彼見さえ、まげくうてく悪八と男八
可成程ふ遠ざろう公がけくいまるけまども桜なる美かに
らーふのふ支程ふ男こてうのく兼瑠ふまるえ
必然おるひ成ナ　そこも私が宣初うつるひので
お茶桜ふ眼ーをのみけでくあるませんが桜も意くのて
ふうるひうう お茶桜の顔を見るこ言程を言うつぐ
程を言て便つふして居るのごらぶ嬉ーしてお主ふ
まーヨ判ーそうやナモノ代身の桜なものを公桜ふまるア

ける　なるほど　仏　所　まだ　力　ある　と　言って　自慢する
ばかり　及　ばぬ　相撲　今　はじめて　出る　素人　アンタ
ふしぎ　今　若　は　仕合　止宿　明日の　相撲　とまる　その
若　も　然　し　お　ぶん　成ノ　姉　しのへ　完　笑ひ　孔
髪　を　結　て　浦田の　渡　醤の　格好　を　直し　その　あまり
泣　ふり　涙　で　顔　が　汚　なく　なり　まし　判
常住　ふり　猶　笑　業　を　つく　ふり　今　嬢　仏　幸　温順
寝　ふ　まで　宜　が　仏　様　も　ばかり　しの　ぶん　その　ヤ

まで　も　悪　癖　と　言　は　仕　ません　温順　言　て　寝　ます
お　寝　じ　ゐ　ヨ　判　ヘ　然　そ　ど　ヤ　仕　臭　ら　ものも　言　ひ
で　枕　を　明　し　さ　ま　れ　ば　結　の　その　アレ　サ　ま　ヤ　ア　で
ざ　ま　ん　も　結　み　気　地　の　悪　ひ　る　と　言　は　な　で　仕　幸　私　の
乳　の　安　法　結　ま　し　て　お　ぶん　成　ナ　ま　へ　判　乳　の　母　せ　る
結　ふ　今　夜　ふり　込　で　来　さ　ば　内　義　さ　ん　を　教　ら　て　帰
て　生　れ　ば　宜　ら　ふ　その　イ　エ　ナ　ア　ニ　ア　ノ　仕　内　義　さ　ん　が　役　を　言
帰　ら　ば　小　居　結　ば　仕　結　ば　せ　ば　私　き　ヤ　ア　お　前　さ　ん　さ　ま

捨て置きたるけるまバ他のるハ少しもうるやア仕ません
いろ判へマアく何でもあしくこのるひサ夜がふけるうるさ寝く
寝るなせん個変二三日止宿客がありて夜ろ長蒲団も
借て来ようまさうふ風邪もひうせるひト言ひのうち
あるを陽て変蒲団仕拵る編ふしが庵草の模様も
ようり表表千種徴びの露ひさうう寝ぬ
寒衣くさねぐのお墨がを寝ぬるへヲやく手拵ふマアろ
蹟ふ寝まるのうへ寝ぐ子へトキ夜ハそふ中ちけりこのだきハ
オロそれ目ふいうそうくうく

## 第十八回

あふ亦峯次郎ハ病身を言立て危角別荘ふのうれび
暮しけるが父の病気ようり本家ふ立帰り出入を仰付り
且ハ別家の内用まハ商売の仕合の間屋の職合彼
見と子代の不及るあまバ絶ふ家ふ身を落て
まるの世話をるけ人ふ父の病気も平癒ハ仕合を幸
ひふ亦督を峯次郎ふ渡ハ青森より登り 妙京と峯次
郎の女房ふ宮めて世話のうれめとすけるふそふ京の父ハ大

金の内へ相応に津藩の人こづかの田地を残し別家の者に支配させ先祖の菩提所の世話を不怠勤る相応なら
ひ千俵の田地家屋敷へ引取有金弐千両
一万八千両俵を嫁金に寄せ京の持参金と一緒に
帝に送り八千両とりて婦人の我儘に隠居屋敷
こしらへて住居する時に嫁は帝の妻お房の二人ゝ
如何に成せしやとの事なり帝の母はお奈のことの様子を
聞知りしゆゑに親族の間とり計て不通となりし お房の母に

和侯と種々と侯金ひ沢山させ お奈改 婦女川より
川元柳川亭と寄合茶屋の株を求めて お奈母子ゝ
住居せ姉のお房も相応に世話をなして相
意の方へも縁よ結て安べしとなやふ ひけるが 此帝
お奈も 妻次帝の母へ対しそお房のつもりはさしがふ言葉
程くお房の母ハ元来姉妹の二人とも 妻次帝とうけ
ものハ知ぬお房も後こ対ふ帝に
母の信切あれバ何ども 意ま 法ひまづお奈を連て

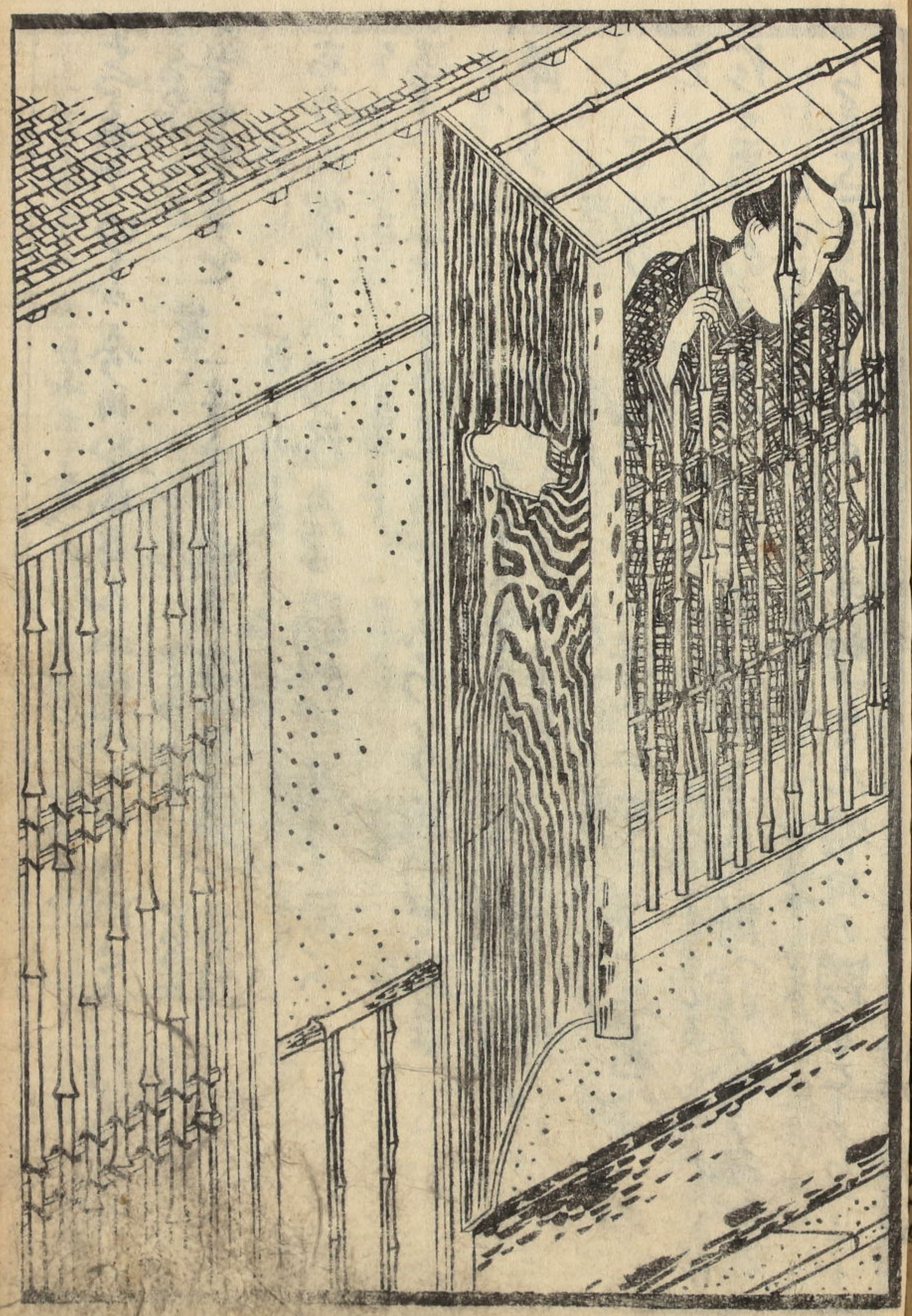
柳川亭へ引移りしが、お房も意地つよき性なれば
益々未練多くを言いぞ姉のお豪をまもりて母と同居
さて手奥一人和哥町に残りのみ全盛の倡女とつゝ
ひそかに養次郎を招きて恩なき楽しみをなさんとたくみ
そ智をめぐらしてお豪お京の二人とも押籠て家に帰りの気
叶はずして霜せんと意の毒気地を磨きて一隙見ざる
むの花笑いとて容易解けがたし
○さて養次郎は母が内のたゝひとそ父は初めより
ども女親の情深くして義絶しえず親類縁は目下
多お豪の母と和談してお豪を手身の妻として呉
たる実意人数してまぶ姉の方と初めありとは明して
いはんぬ気の毒とは思ひつゝまづお房をば手伝ふ
捨て乗りが梅川善孝と彩み別に一軒の家を新に
選他方ぐさしてぶひ西宮の名月を借て移徙
の祝ひとし望みの如く左衣を勧めさせて家内の法
業は養次郎の行ふ不自由なく斗ひけるが実に人情の厚く

所ハ違ふいろ〳〵な物喰ひたがる有福の人の癖として
巻源氏ハ如何をも可愛がるふあり
ねどもを放して廻る房吉が奈何ともしても可憐もの
生家内の用事の乃と見合せて出かけるのくろ屋
義の用事同家の用事何ふ不便を代の役をも
自身入勤める指ふ入つけて陪〳〵暮り黙ひ文日三百
で家ふ帰らず悪角れ方所へひろりて房吉の伴ふ
居後〳〵を樹を使居と幸ひ人への気ガ枝のもひが

楽〳〵とハ物好なぐ〳〵當人の気ふまとバ成ふも
ある変ふ作者いく巻表ガオ
巻源さんおまへ今夜アも方ふ居てお呉んなさらふな
ト家の出来子のそうりくとき房吉ろ怒ってくるアマア
巻へヨヤ房吉ろ怒ってくるアマア
完へ這入んわへナ　ろくへイエ今いそぐ〳〵方報ちゃ居
らとなひョ今日ハ桜川の呉春さんと栄次さんガ約束で
おくまのお客で私と大吉さん鶴次さん菊次さんと大勢で
今年清へ行レしゃアる　巻へ方報ろ大造ふ早ひお客ごの夫

コレヤアいゝが晩にハおらア居ねへからお前ハ別り西の宮に寝な
るがいゝ〽ヲヤすぜへ今夜ア此地に居ておくれなへ〽丈
だつておらも種々用があらアナそして今日で三日といふもの
帰られへから母人さんハいゝが父親さんの前へ済ねへハナ〽フウム
そんならお家さんの前へ出る面ひざら子それじやア縦からモウ
家私の方へお出でなさい勝手しのトいつ一時しも隣家まで
稽古の新内節
〽逢て嬉しさ顔ハおかしその胸の奥座敷にめぐし忍と

底の情見せ對する肌着のひよく縫目もせきたへ
おのが心の醒ようと気にかゝり無言傳の逢てさへ
来ぬとまるその堀とうるび思ひの身とぞぐれ下略
岩〽まア手をさつまらねへことをいつ此方が主の借問を
言そとうハねへ極にまよふとのそのものを見てお家の借ミ西
宮の方の金を算段して早く都合をよくしてと思ふから
だアナ今お前が本家を出でもまるとうかくお家に苦労させ今
此不幸者る極にひらアナ〽ハテ御苦労ど御免なさいましヨヤ



ちやアのくが今日お糸さんお宅へお出成さう洋蔵さんも
ひらるのくりを　番頭　まさ子様の方角遠くて吉弁ヨ　徳町と
ちろの伝兵衛さん　伝様ばかり　隅の方で居ると思ふナ　ヲヤ〳〵左
様ク人　和アア　まさ近所ごとだらう思ひて居まり〳〵ハトのふ
流ろう伝右の和十　和十　格さん時人ハ法度ゴヨ
き　ヲヤ　賑りしさ　和十さん　伝所へお出ご　和　此宅へサ　ヲヤ
伝ぞ用があるのク人　和ア　番頭　法華きんの所へ時人ク様を屋
らまさろうちまのと　ヲヤ　和十さん　明日の題をこらくとが

伝様も出来がつろいろ　ヲヤ　合まりてこまろう糸ふお糸の
ちくさ方が能さそうご　和　六〳〵　番数が多ンク一人で考ろ
と伝様も同ト様ふろう　ト　陸子様あけてさろうがく　和　房
吉さんおさろうごらくふ　ハ　立　私ハモウ参りました。それじゃ
ト　格さん　頼を　和分ら　番　ヲんじご　ヲ　アノウト　後ハ小さろうて
あしこの晩ハ多度ゴ帰りてお呉ヨ　番　ハム　今夜ハ裏のお吉
老女さんと　面ろ小　頼むぜ　ヲ　アてそてそてトまさ伝申ク考へく
居ろ　和十ハ　笑ひろ　和　イヤ　吉ろ世人子ごご　能加減ふれ

てのをお言ゐせん他所の人が笑ひやを　きさ〳〵ヨ〳〵〳〵夫やア
まア参らんる　嵯さん何も用ハあひらん　和〳〵　まご未徒ご
殘つて居るのごま　きさ〳〵ホ〳〵〳〵ヒ　うらうらの方ご
うるさらふ　きさ〳〵ヨイヨ　おくまひでうひうきろても　和〳〵
おくまひやませんら〳〵　陸ゆうとおのろけ　拾ハーませ
きさ〳〵ヨア　遲くうるら〳〵　来らふ　和十さん　ハイ左拾ら〳〵　和〳〵
御く　ハイ左拾ら〳〵ご出ごノドレ　和ッ　ご　信行ごの出ぬ
あるや　せうよ　房吉のわとえ送る　房吉ハ二足三足　ご

糸を戻り　きさ〳〵アノウ〳〵　和十
さん　お茶ま然らふのごやアあひハ　嵯〳〵　ヨイヨ　和十
嵯び出ーてト　橋ま〳〵　顔を出せば　きさ〳〵アノウ　今夜お和さん
何方のお宅へお止宿　夫ご成ごさ　嵯〳〵　夫と関のごろ見世
の閉らあるら〳〵行のごアナ　きさ〳〵　夫ら〳〵　能けさごも　アノ今
夜ハ姉上さんの方へ止宿ちやア　嵯ごごおまんヨ　嵯〳〵
何様ーてお茶の方へ行て居ら〳〵　ろうめらそーて今日ハ母
人さんがお家を連て　伯父さんの所へ止宿ごけふあそびふ

彩とのゝ〳〵本宅へ帰りて老父ふうとして居るひと侍り
ゝるいハナ　き〳〵ハんこうゝ夫ゝやア明日の晩は方へおゆ
でゝ大丈夫ゝゝ　義〳〵　行ゞ　き〳〵アレサまゝ彩の方へ来て頭痛
ゞとるの乳をうるひのとおゝ言ひゝやア居ごとゝいゝるで
ござゐまんゝト義〳〵ちゞ〳〵の人形しも　接川　義孝ごぜんゝの由
義〳〵ザアく路ゝゝとゝて居ちやア彩ひお名ぎゞ〳〵
き〳〵ヲホ〳〵〳〵義孝さんモウ文変をまるのゝ　義〳〵モウく遠ひ
ゝゝゐごョト　言ひまて房ゝ　矢出〳〵て彩　義〳〵由さん出て

おゝるる　和千さんも来ゝ　お出ごゝう　義〳〵ハイ有ゝまちゐと
一ぷくのごゝたませうゝる　和〳〵義孝さん　耶見ハ大きゐ　義〳〵イヤ
和千さんさゞ　耶見ハ　お労まゝで　本三見家が私の所ゐ居ゐて
居ますヨト　言ゝ二ツ三ツ言ゝて居る　中ゐ寺町の
巳刻の鐘ゴゝ〳〵〳〵

春色梅美婦祢巻之九了